濱田雅子の

アメリカ服飾史著作集カタログ

濱田雅子制作

目　次

濱田雅子のプロフィール

【理論と実践は車の両輪】



若い頃、神戸大学文学部で西洋史学を専攻しました。そして、同文学部で研究助手を務めていた３年半、アメリカ史研究に従事していました。その後、文化服装学院の通信教育で洋裁を学び、２年間の課程を修了後、洋装店でオーダーメイドの服作りや高級婦人既製服（プレタポルテ）のパターンメーキングや裁断・縫製の仕事についていました（1976-1981 年アパレル関係の仕事に従事)。著者の略歴は、本カタログの最終ページに記載しています。また、https://www.american-mode.com　および、researchmap.jp/hamada888 を参照していただければ、幸に存じます。前者の URL には、著者が創設したアメリカ服飾社会史研究会の記録が掲載されています。

今日では衣服生産も中国や韓国、インド、ベトナム、カンボジア、バングラディッシュなどアジアや東南アジア方面で行われていますが、私がアパレル業界で仕事をしていた頃は、日本のすばらしい伝統的な技術が世界の脚光をあびており、この業界が活気付いていました。

我が国のアパレル業界がアクティブな時代に、伝統的な技術を身につけることができたのは、貴重な経験であったと確信しています。自分や家族の服が作れるようになりたかったということは勿論ですが、なぜか将来は西洋服飾史を学ぼうという夢を抱いていた私にとりましては、ありし日のパリの縫い子さんの仕事ぶりがわからなければ、西洋服飾史の本質は分らないであろう、という考えが、洋裁を始めたきっかけでもありました。

そういうわけで、理論と実践は車の両輪であり、大学においてもこのような考えに立った教育が行われるべきだというのが、私の持論です。

【アメリカ史研究からアメリカ服飾史研究へ】

アパレル業界で働くかたわら､西洋服飾史の勉強をはじめました。我が国の西洋服飾史の草分けでいらっしゃる故丹野郁先生に、和田典子先生からご紹介いただき、丹野研究所（東京都豊島区東池袋 1-20-2 池袋ホワイトハウスビル 720 号）に通うことになります。丹野先生は、私が先生の研究所に通い始めて間もなく､「濱田さんはアメリカ史のバックグラウンドがおありなので、アメリカの服飾史を研究して、論文発表をされると良いですよ」という貴重なアドヴァイスを下さいました。

濱田は、その 10 年余り前に、神戸大学文学部に助手として在職中に、アメリカ史の専門家の故本田創造先生（元・桜美林大学副学長）のご指導の下にアメリカ史を学んでいます。「アメリカ史の研究者にとって、アメリカ服装史という文化史の分野は今後、開拓していかなければならない大切な研究分野ですよ。服飾史のご専門の先生のご指導のもとで、しっかり研鑽を積んで下さい」という本田先生のお言葉も丹野先生のお言葉と同様に、脳裏に焼きついています。

【服飾史の研究方法】
アメリカ服飾史研究の方法として、英語文献や英文史料の講読とフィールドワークという二本の柱を常に念頭において歩んで参りました。

濱田は「服飾史を単なる服飾の変遷の羅列史としてではなく、衣服を取り巻く環境、すなわち、気候・風土、政治、経済、文化（芸術、文学他）宗教など他の社会科学分野の諸要素との関わりを常に意識して、総合的に進められければならない」という筆者が師事させていただいてきた、丹野郁博士のお教えを守るべく心がげてきました。今後の著作においても、師の説かれる服飾史の研究方法に忠実に沿った著作になるべく努める所存です。地球環境が大きく変化している今日、服飾研究者が果たす役割も問い直されているのではないでしょうか。例えば、環境にやさしい衣服産業のビジネス・モデルの提案など、大きな課題に直面しているのではないでしょうか。

【アメリカ服飾史研究の動向】
わが国おける欧米の服飾史研究は、 ヨーロッパの上流階級の服飾研究が主流であり、アメリカ服飾史の体系的な研究は、大変、希少です。

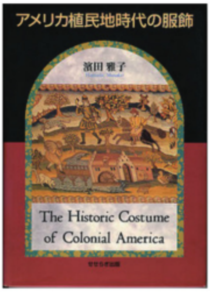
本カタログでは、濱田雅子のアメリカ服飾史著作集のタイトルと目次、および概要を紹介しています。これらの著作は、商業出版物と POD 出版物、および電子書籍から成っています。

濱田の分析の視点は、上流階級の衣裳のみならず、中流階級、および下層階級の衣服に向けられています。また、アメリカは移民の國であり、多民族国家です。従って、著者はネイティブ・アメリカン、およびアフリカン・アメリカンの衣服、およびテキスタイル文化にも目を向け、現地調査も行なっています。衣服の実物がほとんど残存していない、民衆の衣生活を扱っているのも大きな特徴です。

【POD 出版とは】
POD とは、デジタル技術を活用した Print on Demand の頭字語です。この方式では、誰でも著者責任で著者になることができるのです。また、読者から注文があってから、印刷をして、２～３日で読者に届けられます。書店は、売れ残った在庫をかかえることもなく、環境に優しい方式なのです。絶版にもなりません。著者は編集者にもなれます。自分でできないことは、お金を払って、専門の業者にお願いすればよいのです。濱田の POD 出版物と、電子書籍は装丁・編集、表紙デザインは、すべて濱田の手によるものです。

今後、このカタログがアメリカ服飾史研究を志す研究者の皆さんや服飾史を学ぶ学生の皆さんに役立てていただけるとたいへん、幸甚に存じます。また、専門学校や大学の図書館に、本カタログで紹介させていただいた著書を所蔵していただけると嬉しく存じます。

アメリカ植民地時代の服飾
The Historic Costume of Colonial America





せせらぎ出版、1996 年
ISBN-4915655679
版型　ページ数　B5 判　252 ページ
定価：6,408 円（本体 5,825 円＋税）
〒530-0043
大阪市北区天満 1-6-8 六甲天満ビル 10 階
Tel　　06-6357-6916
Fax　　06-6357-9279
E-mail　info@seseragi-s.com

アメリカ服飾史研究書は、欧米にも僅少であり、まして日本では皆無に等しい。本書はアメリカ史学と服飾史学を結合させた日本で最初のアメリカ服飾史の研究書である。合衆国の新しい社会史研究に新たなる地平を切り開いた書と言っても過言ではない。著者濱田雅子（武庫川女子大学助教授）氏は神戸大学でアメリカ史を専攻され、次いで武庫川女子大学の大学院で、西洋服飾史研究の第一人者の丹野郁（国際服飾学会会長・埼玉大学名誉教授・文学博士）先生のご指導のもとにアメリカ服飾史研究に取り組まれ、以来、ライフワークとして精力的に研鑽を積んでおられる。

「植民地時代の生活の様相こそ､本書がかなり明確に答えてくれるであろう。特に第２章はハイライトで、信頼すべき文献を忠実に参照し、分析しつつ、独自の見解を出しておられる。とりわけ、文献の渉猟は抜群であり、また実証的研究も重視されて、再三現地探査により遺品を確かめておられることが、本書の随所に現れている。この有意義なアメリカでも珠玉の書として評価されることと確信している」(丹野　郁「序文より」)。

専門書・教科書として高い学問的水準を持つと同時に、豊富な写真・図版・地図など（189 点）を駆使して、平易な記述を工夫されており、アメリカ史研究者、服飾史研究者はもちろんのこと、アーリー・アメリカンに興味を抱く専門外の読者をも魅了するであろう。

せせらぎ出版　チラシより

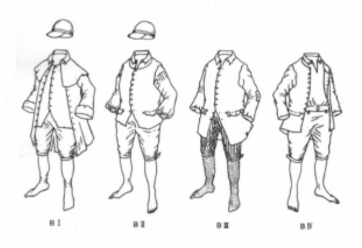
アメリカ史学と服飾史学を結合した日本で最初のアメリカ服飾史

目次

黒人奴隷の着装の研究

―アメリカ独立革命期ヴァージニアに」おける奴隷の被服の社会的研究―





逃亡奴隷のイラスト

東京堂出版、2002 年
ISBN 9784490204605
判型・ページ数 B5・252 ページ
定価 本体 8,000 円＋税

18 世紀、アメリカ独立革命期のヴァージニア。プランテーションで働く"黒人奴隷"は、どのようなものを着ていたのか。実物の現存が皆無の研究条件のなかで、著者は、当時の「逃亡奴隷広告」に記された黒人奴隷の逃亡時の被服描写やプランターの手紙・帳簿などの諸史料、あるいは出土資料、復元した被服素材などを悉く現地調査した。

さらに、今は使用されなくなった多種の被服素材を逐一検証し、また史料・関連文献をデータベース化して解析しながら、服飾学と歴史学の確かな眼をもって、彼らの衣生活の実相に切り込んだ。そして、黒人奴隷の着衣のイメージや、当時の有力プランターの被服管理の実情等を、当該期アメリカ史の流れのなかに位置づけることに成功した。

アメリカにおいても未開拓の研究領域に真正面からアプローチし、上流階級のきらびやかな服飾史とは異なる中産下層の民衆の衣生活を描破した画期的な労作。

本書の帯より

小説『ルーツ』のなかのクンタ・キンテが着ていたものを考証！

目次

逃亡奴隷広告を史料に数量化

本書執筆の動機は、アメリカ黒人作家アレックス･ヘイリー作、安岡章太郎、松田銑共訳の『ルーツ』（社会思想社、1977 年）にある。ヘイリー氏がアフリカのジュフレの村をたずね、みずからの先祖を探しあて、7 代 200 年を描いた小説『ルーツ』は、世界的なベストセラーとなり、ピューリッツァー賞を受賞した。この作品はテレビドラマ化され、話題作として脚光を浴びた。作品中の「主人公のクンタ・キンテが着ていたものを考証できるのは、歴史学と服飾史学の研究に従事しながら、アパレル産業の現場で実際の服作りに携わって来たあなたしかいないですよ。」とアメリカ黒人史のご専門家で、神戸大学文学部の恩師である故本田創造先生から「奴隷の 着るもの」研究をお勧めいただいた。これは 1985 年ころのことである。「奴隷の 衣服」とおっしゃらなかったのが印象的で、今も鮮明に記憶している。師のご助言こそ、私が「奴隷の着るもの」の解明に取り組みだした直接的な動機である。私自身は、このようにお勧めいただく前に、『ルーツ』の翻訳書を読んだり、テレビドラマをビデオで観たりしていたのだが、小説やテレビドラマのなかの奴隷の被服描写に疑問をいだいていた。本書は著者の博士論文が元になっている。

アメリカ服飾社会史



濱田雅子著、アメリカ服飾社会史、
東京堂出版、2009年
ISBN 9784490206692
判型・ページ数 A5・256ページ
定価 本体 2,600円+税　絶版



『アメリカ服飾社会史』重版
株式会社 PUBFUN　2022年7月26日
　POD 出版
アマゾンで販売
版型　ページ数　A5・272ページ
定価　本体 3,000円+税
ISBN　9784802078399
Kindle 版　アマゾン　1,000円



平原部族のスキンドレス
国立民族学博物館蔵



平原部族の羊毛製ワンピース
国立民族学博物館蔵

【重版にあたって】

本書の初版が東京堂出版から発行されたのは、2009年6月のことです。多くの読者の皆さまのおかげで、2015年には品切れになりました。それから、7年の歳月が経過して、このたび、ようやく重版の運びに至りました。その間に、著者は、以下の3冊の『アメリカ服飾社会史』の続編を株式会社インプレスR&DからPOD出版しました。併わせて、アマゾンからKindle版電子書籍も出版しました。

わが国では、著者が38年間に渡って取り組んできたアメリカの服飾史研究の分野、とくに上流階級のみならず、中産・下層階級、アフリカン・アメリカン、先住アメリカ人の服装に関する研究は、大変、マイナーな研究分野です。しかし、今や、貴族の煌びやかな服飾にだけ、目を奪われている時代ではありません。このファッションのグローバル化が急増した時代において、民衆の衣生活や生活文化史にも目が向けられなければなりません。

近年、出版業界において、出版革命が起きています。それは上述のPOD出版という新しい出版形態の誕生です。PODとは、デジタル技術を活用したPrint on Demandの頭字語です。この方式では、誰でも著者責任で著者になることができるのです。また、読者から注文があってから、印刷をして、2～3日で読者に届けられます。書店は、売れ残った在庫をかかえることもなく、環境に優しい方式なのです。絶版にもなりません。著者は編集者にもなれます。自分でできないことは、お金を払って、専門の業者にお願いすればよいのです。この度の重版はPOD出版であり、電子書籍も出版されます。装丁・編集、表紙デザインは、著者の手によるものです。本書の出版により、濱田雅子の『アメリカ服飾社会史』シリーズ1～4が一堂に会することは、大変、感慨深いことです。いずれも学術書ではありますが、一般読者の皆様にも分かり易く、楽しくお読みいただけるシリーズをなしています。

本書の重版に当たって、初版の誤字・脱字の修正、内容の追加・修正、索引の添付を行いました。

最後に、このようなオンデマンド出版という新しい時代の出版革命に、いちはやく呼応して、重版出来を認めて下さった東京堂出版の名和成人氏に心から感謝申し上げます。

2022年7月

著者識

本書より

貴族の煌びやかな衣裳だけではなく 民衆の衣生活や生活文化史にも 目をむけたアメリカ服飾社会史

【内容紹介】

本書では、植民者とともに渡ったヨーロッパのファッションは、アメリカという大地でどのような変化を遂げたのか？その独自のファッションがつくられる過程に迫ってみた。さらに20世紀において、パリモードからアメリカンモードへの転換がいかにしてはかられていったのか？アメリカン・ファッションの世界発信にも目を向けた。学術書的な読み物ではあるが、一般読者にも読みやすく、興味深い一冊をめざし、アメリカの民衆の衣生活を、以下の８つの章に分けて、社会史としてわかりやすく描き出した。

わが国では、著者が38年間に渡って取り組んできたアメリカの服飾史研究の分野、とくに上流階級のみならず、中産・下層階級、アフリカン・アメリカン、先住アメリカ人の服装に関する研究は、大変、マイナーな研究分野である。しかし、今や、貴族の煌びやかな服飾にだけ、目を奪われている時代ではない。このファッションのグローバル化が急増した時代において、民衆の衣生活や生活文化史にも目が向けられなければならない。

【目次】

アマゾン　カスタマー・レヴュー☆☆☆☆☆

吉川佳英子

アメリカ服飾社会史』、ふたたび

本書は『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）の重版です。2015 年に品切れしたのち、あらたに POD 出版したものです。あわせてアマゾンから Kindle 版（電子書籍）も出版しました。重版にあたっては、著者による初版の修正がなされているだけではなく、見やすい索引の添付もあります。一般読者にもアプローチ可能な学術書として、期待以上の出来栄えとなっています。著者の長年の研鑽がぎっしり詰まった珠玉の力作は、アメリカという土地に形成された衣服の歴史と文化を、庶民の生活のありようを視野に収めたうえで､見事に再現しています。豊富で貴重な資料や写真の数々は､「真実」に肉迫しようとする本書の野望に、十分、応えていると言えるでしょう。そう、本書は可能な限り実証的に、アメリカの当時の姿を再構成しようとの「夢」を追求しているのだと思います。再登場が嬉しい限りです。

鴇田　章

濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』重版によるシリーズ化へ

『アメリカ服飾社会史』（2009 年発行）は 2015 年に品切れとなり、今回、初版の補足、修正と併せて重要な写真はカラーに差し替え、事項と人名の索引が加えられました。アメリカという国の成立と発展に関わった人々の衣服をとりまく歴史を学術的に分かり易く究明した作品と言えます。

そして､『パリ・モードからアメリカン・ルックへ』(2019 年)､『アメリカ服飾社会史の未来像』(2020 年)､『20 世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実』（2021 年）とアメリカ服飾史研究の第一人者と言われる著者濱田雅子氏は 2019 年から毎年アメリカ服飾社会史のシリーズ化として、今回の重版を合わせると 4 冊の体系化に成功されました。さらに、著者自らの研究で得た資料に基づき植民地時代の服飾、黒人奴隷の着装、アメリカ史に見る職業着、そして、『写真が語る近代アメリカの民衆の装い』（2022 年）など貴重な著書を数多く出版され、その研究意欲の凄さには脱帽です。

パリ・モードから
アメリカン・ルックへ
—アメリカ服飾社会史　近現代篇—




図 12　オナイダ共同体のコスチューム

濱田雅子著『パリ・モードからアメリカン・ルックへ―アメリカ服飾社会史　近現代篇ー』（POD 出版）
電子書籍　アマゾン　kindle 版
ペーパーバック（Next Publishing インプレス R&D POD 出版サービス）　2019 年 1 月 10 日　アマゾンで販売中

本書は拙著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009 年）の近現代篇である。とはいえ、本書を前著とは切り離して、単独の著作としてお読みいただくのは、読者の皆さんのご自由である。本書は二部構成であり、第一部では、19 世紀から 20 世紀中葉アメリカのドレス・リフォーム運動の実態とその衰退をテーマとしている。下記の目次に見るように、第 3 章では「ブルーマー運動」の実態とその衰退、衰退の要因について検証した。「ブルーマー運動」の衰退後、ドレス・リフォーム運動が復活する。第 4 章第 1 節では、この運動の復活に取り組んだリディア・セイヤー・ハズブルック（Dr. Lydia Sayer Hasbrouck, 1827 ～ 1910）が編集した機関紙『シビュラ』（Sibyl*）紙におけるドレス・リフォーム思想について論じた。第二部では、「パリ・モード」から「アメリカン・ルック」への転換をテーマとしている。

以下、本書の内容紹介を兼ねて、要点を述べる。

【第一部】イギリスを初めとするヨーロッパの人々は、17 世紀にヨーロッパから移住してきて、アメリカ大陸に植民地建設を行い始めて以来、ヨーロッパの貴族の服飾への強い憧憬の念をいだき続けてきた。アメリカでもこの自由で、動きやすいローブが取り入れられるのであるが、それも束の間、19 世紀前半に、再び拘束的な衣装が復活し、コルセットを装用したきつい紐締めによる拘束的な衣装は、女性の健康、生まれてくる乳児の健康を蝕んだ。19世紀のニューヨーク・ファッションは、基本的にはパリ・モードであった。このようなパリ・モードの華やかなりし時代に、他方において、以上のような拘束的な衣装様式に抗して、1824 年から 1920 年にかけて、ニューヨークとその周辺においてドレス・リフォーム運動が興こされた。今日では、女性がズボンを穿くのは、国際社会における当たり前の文化となっている。ブルーマーは、我が国では、一時、女子生徒の体操服として普及した。19 世紀アメリカにおける女性のドレス・リフォーム研究を行っているアメリカの服飾研究者ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャー女史は、既存のブルーマーリズム研究を再検討し、19 世紀アメリカにおける女性のドレス・リフォームを一期 1824 ～ 1851 年、二期 1851 ～ 1879 年、三期 1879 ～ 1920 年に区分して、新しい研究を行っている

筆者は、前著では、二期の 1851 年のブルーマー・コスチューム誕生と挫折のみを扱った。本書では、フィッシャー女史の研究を踏まえて、第一期から第三期を対象に考察し、さらに価値高い第一次資料を発掘・解読し、新たな知見を加えた。本書では、資料的価値の高い第一次資料の文書の紹介・分析を通じて、ドレス・リフォーム運動の本質に多少とも触れることができたところに、筆者のオリジナリティがあるものと確信する。

前著『アメリカ服飾社会史』の続編（近現代篇）の第二部では、ニューヨーク都市における商業およびファッションの発展を背景として、ドロシー・シェーバー（Dorothy Shaver, 1893 ～ 1959）の活躍ぶりを取り上げ、「パリ・モード」から「アメリカン・ルック」への転換をもたらした牽引力について、明確な答えを打ち出す。彼女は、我が国では馴染みがないが、実は 1826 年に設立された老舗の百貨店であるロード・アンド・テーラー（Lord & Taylor）の副社長を 1931 年から 1945 年まで、社長を 1945 年から 1959 年まで務めた女性である。ドロシー・シェーバーに関する研究は、我が国では皆無である。アメリカにおける先行研究も大変、稀少である。筆者がドロシー・シェーバーに着眼した動機は、アメリカ服飾学会の学会誌 “Dress” に掲載されたアメリカの服飾研究者ティファニー・ウェーバー・ハンシェット（Tiffany Webber-Hanchett）の論文との出逢いである。

拙著『アメリカ服飾社会史』第 8 章では、ごく簡単にドロシー・シェーバーに触れるにとどまったが、その後、サンドラ・リー・ブラウン（Sandra Lee Braun）の大変、実証的で造詣深い学位論文を入手し、熟読する機会を得た。そこで、本書において、これらのお二人のご研究に基づいて、ドロシー・シェーバーのマーチャンダイザーとしての活躍ぶりを、一般読者の皆様にもわかりやすく、興味深く紹介させていただく次第である。

本書を通じて、19 世紀から 20 世紀半ばにかけてのアメリカにおけるドレス・リフォームの二つの波を、いくらかでも身近かに感じ取っていただき、ファッションの研究、ファッションの現場で、21 世紀のファッションのあり方を追求して行かれる上で、役立てていただければ幸いである。

ネクパブ・アワード二〇二二
審査員特別賞授賞

目　次

書　評　アメリカ服飾社会史研究会会報 No.11

安城寿子　阪南大学流通学部准教授

安城寿子氏がアメリカ服飾社会史研究会会報 No.11 にお寄せ下さった書評を、掲載させていただきます。

まず、発表者自身のこれまでの研究について簡単に述べておきたい。発表者は、平成 27 年度にお茶の水女子大学に提出した博士学位論文を含めて、「近代の日本におけるパリ・モードの受容」をテーマに研究に取り組んできた。日本では、近代のある時期、様々な場面で、世界の服飾の流行の中心はパリであるということが語られ、また、パリの高級注文服店が生み出す新しいデザインがさかんに模倣されてきた。そうした歴史をめぐって、特に、「日本において、創造性や独創性を重視する服飾デザイン観はいつ頃どのようにして成立した（受容された）か」を明らかにすることが発表者の問題関心の中心である。

以上の課題に取り組む上で最もネックだったのは、序論として、そもそもパリ・モードとはどういうものであるかを論じる際に依拠することのできる実証的な先行研究がそれほど多くは試みられていないことであった。「モード都市・パリ」の歴史は、フィリップ・ペロー、ダニエル・ロッシュ、ナターシャ・コクリー、ヴァレリー・スティール、近年では角田奈歩や朝倉三枝らによって明らかにされてきたが、これらは、いずれも、18・19 世紀のフランス国内における変化に主眼を置くものであり、パリの流行が他の国々の服飾文化にどれほどの影響を及ぼしていたかについては研究の余地が大きく残されているように思われた。特に、19 世紀後半から 20 世紀にかけて存在感を強めてくるアメリカという国とパリ・モードの関係性がどのようなものであったかという疑問に十分に答えるものは少なく、発表者は、常に、手がかりとなる研究を探してきた。

最も多くの示唆があったのは第二部第 1 章である。S・B・マーケッティと J・L・パーソンズによる研究やサミュエル・ホプキンス・アダムズの論考の紹介とともに、そこでは、20 世紀初頭のニューヨークにおいて、「パリ製」であることが特別な意味を持っていたがゆえに商品の出所を偽る偽造商法が横行していたこと、さらに、パリ・モードの威光の陰で、アメリカの服飾デザイナーがなかなか表舞台で活躍する存在にはなりえなかったことが明らかにされている。この第一の点は、非常に重要である。というのも、20 世紀初頭のアメリカにおけるパリ・モードの模倣の問題が語られる際、先行研究や関連書籍の多くは、1913 年に渡米したポール・ポワレが「ポワレ」のタグの付いた大量の偽造商品を目にして激怒したという逸話に言及してはいても、アメリカにおける偽造商品の実態について史料的裏付けとともに明らかにしてきたわけではないからである。第二部第 1 章の内容を通じて、アメリカで横行していた偽造商法はデザインの模倣とは別の次元で出所を偽る商売であったことが分かった。この事例は、当時のアメリカにおいて、デザイン云々ではなく「パリ製」であることがそれだけで付加価値を持っていたことを物語っている。

さらに、本書の第二部第 1 章後半から第 4 章にかけては、クレア・マッカーデルやドロシー・シェーバーといった「アメリカン・ルック」の創造に貢献した多くの事例が紹介されている。特に重要だと思われたのは、1930 年代以降徐々に表舞台に現れるようになったアメリカの服飾デザイナーたちが「実用性」を強く意識していたという指摘である。パリとニューヨークはしばしば「芸術性／実用性」という対照的のもとに語られることがあるが、多くの事例を踏まえた上でそうした指摘がなされていることは意義深い。

アマゾン　カスタマー・レヴュー☆☆☆☆☆

樹理

豊富な索引と貴重な写真、こと細かい説明はファッション専門学生にもおすすめの書籍と思いました。AmazonPOD 版のほかに Kindle 版は、さらに索引テキストがスグれていて超便利でした。

吉川佳英子

ブルーマー運動をドレス・リフォーム運動のなかに巧みに位置づけ、19 世紀末から 20 世紀にかけてのファッションの動きを大規模に論じたダイナミックな傑作です。ヨーロッパとアメリカを同時に視野に収めた点も意欲的。ポワレ､ヴィオネ、シャネルといった 19 世紀末のパリ・モードの動きを踏まえたうえでの同時代のアメリカン・ルックへのアプロ―チは、21 世紀のファッションを展望するにあたり、極めて効果的と言えるでしょう。ドロシー・シェーバーの記述に出会い、その内容を参照したのが日本初というのも本書の重要な特徴です。

鴇田　章

西洋服飾史と比較してアメリカ服飾史の出版物は非常に少ない中、アメリカにおけるファッションの主流がパリ・モードからアメリカン・ルック誕生への経緯を分かり易く書かれた力作です。特に、20 世紀初頭のドレス・リフォーム運動と戦時下の衣料制限規則 L-85、アメリカン・ルックの推進者ドローシー・シェーバーに焦点を当て、多くの資料と写真や絵図も一部カラーで掲載され大変貴重な作品であり、アメリカ服飾史を知る上で必読書と言えます。

アメリカ服飾社会史の未来像

―衣服産業史の視点から―





マリー・クワント
ミニスカート姿
1966 年 12 月
Wikimedia



リーバイスジーンズ
Wikimedia

ペーパーバック（Next Publishing インプレス R&D POD 出版サービス）
2020 年 4 月 10 日　アマゾンで発売中　定価　　2,970 円＋税
電子書籍　アマゾン　kindle　1,000 円
版型　ページ数　A5・226 ページ

【内容紹介】

本書の主題は「アメリカにおける環境と衣服に関する諸問題」である。

本書は服飾研究者、ファッションを学ばれている学生の皆様、ファッション・デザイナー、アパレル産業で衣服生産に携わっておられる皆様、環境問題に関心のおありの皆様の必読書と言っても過言ではない。

本書の全体構成は目次（本紹介の文末に掲載）のとおりである。

４冊の拙著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009)、『パリ・モードからアメリカン・ルックへ―アメリカ服飾社会史　近現代編―』（POD 出版、2019 年 1 月）、および、『アメリカ服飾社会史の未来像―衣服産業史の視点からー』（POD 出版、2020 年 4 月）『20 世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実ーアメリカ服飾社会史ー』（POD 出版、2021 年 4 月）はシリーズを成している。

本書は二部構成である。第一部では、アメリカの戦後のドレス・リフォームの第三の波を、第二部では第四の波を扱う。第一の波と第二の波については、『パリ・モードからアメリカン・

第三の波とは1960年代から2000年代にかけてのファッションからファスト・ファッションへの転換の時期を指す。第四の波については、アメリカにおける未来を視野に入れた環境と衣服に関する諸問題への取り組みに着眼して、紹介・考察を行う。本書のハイライトを成している。

ところで、筆者は、なぜ、ファスト・ファッションに着目したのか。その動機となったのは、ニコレイ・アンゲロフ (Nikolay Anguelov) 氏の著作、The Dirty Side of the Garment Industry, Fast Fashion and Its Negative Impact On Environmental and Society, CRC Press, Taylor & Francis Group, Boca Raton, London, New York, 2016. である。以下はアンゲロフ氏の著書の序章からの抜粋である。

「ファッションは今や『ファスト・ファッション』であり、多くの人々によって創造され、多くの人々によって促進され、すべての人々によって楽しまれています。この新しいファッションの現実は、すべて、手頃な価格、つまり安価な生地で作られた手頃な価格に基づいています。この手頃な価格は不快な秘密をもたらします。大衆へのファッションの普及を可能にするこれらの安価だが高品質の布地の製造は、他のどの工業製品よりも品目ごとの毒性の高い化学物質の汚染を引き起こします。世界銀行の推計によれば、全世界の水質汚濁の20%は、織物染色の流出過程、および天然（大部分は木綿）の布地のすすぎ中に発生しています。」

読者の皆さんは、アンゲロフ氏のこの衝撃的な言説をどのように受けとめられたでしょうか。
本書では、なぜ、パタゴニアに着目したのか。レイチェル・カーソン著『沈黙の春』(新潮社、1974) は、パタゴニア誕生の背景をなしている。パタゴニアの創設者のイヴォン・シュイナード氏は、ビジネスとリクリエーションにおける自然のクリーンクライミングと責任あるケアーを推奨した。カーソンは化学物質が人間、動物、鳥、河川、海などの生態系に及ぼす影響を赤裸々に論じ、警鐘を鳴らしているが、衣服産業が環境に及ぼす影響については論じていない。そこで、第二部ではアンゲロフ氏の著作とパタゴニアの歴史、理念、および、衣服生産活動を取り上げて、衣服産業が環境に及ぼす影響の問題にアプローチする。

今日の大量生産、大量消費が生んだ衣服ロスの現状は、科学技術の発展がもたらした悲惨な結果である。先人が築き上げてきた尊い服飾文化の価値、そして、その背後にある技術者の労働の価値を、今、いちど見直してゆかなければならないと強く思う。我々、大人は、これからの時代を担ってゆく、若い世代の人たちと手を携えて、服飾のもつ文化的価値、文化的意味、文化を生み出してきた人々の尊い労働の価値を認識し、正当に評価し、未来に向けて発展させて行かなけれならないと切に思う。

目　次

衣服と環境問題に肉迫する

本書の一齣から

1．映画「ザ・トゥルーコスト」の概要

日本のファッション産業は、2016 年で約 9 兆 2000 億円。一番、ピークだった 1992 年より 4 ～ 5 兆円も規模が小さくなっている。その理由は「安い、早い、大量、トレンド」を特徴とした、いわゆるファスト・ファッションが急激に増えたからである。ファスト・ファッションの店舗数は、ここ 10 年で 2 倍になっていて、日本の 45％の衣料品は安物衣料である。

表題の映画は、この服飾ビジネスの世界を牽引しているファスト・ファッションをテーマにしたドキュメンタリー－である。この映画は、最新の流行を取り入れて、大量生産された洋服が低価格で供給され、ほぼ使い捨て同然にまでなってしまったファスト・ファッションにメスを入れ、その生産者たちが置かれている現況や環境を追っている。主に欧米向けのほとんどの安価な衣服を作っているバングラディッシュや原料の綿花栽培地であるインドなどで取材した映像を元に、衣服の製造に携わる人たちの劣悪な労働環境、 低賃金長時間労働、化学薬品の垂れ流しによる環境汚染や遺伝子組み換えコ ットン農家の 悲惨な現状などを浮き彫りにしている。

さて、映画『THR TRUE COST』は、なぜ制作されたのだろうか？
アンドリュー・モーガン監督がインタヴュー－で語ったところによると、「この映画製作の動機は、2013 年 4 月 24 日、バングラデシュの首都、ダッカ郊外の 8 階建商業ビル『ラナ・プラザ』が崩落事故を起こし、1,100 人以上の犠牲者を出したという記事が翌日のニューヨーク・タイムズの記事に掲載されたのを読んだからだ」という。

かつてのアパレル業界では、季節ごとにラインナップを揃えるメーカーがほとんどであった。だが、ファスト・ファッションではそうではない。1 週間でショップのディスプレイがガラ ッと変わっていることも日常茶飯事である。そして、安すぎるぐらい安い。消費者にとっていいことずくめのように見えるファスト・ファッションは「世界の縫製工場」バングラディッシ ュなどの悲惨な製造工場によって支えられているのである。カンボジアのプノンペンの繊維工場においてもバングラディッシ ュ同様、労働者の賃上げを要求するデモが起こり、警察官による発砲・逮捕劇が起こっている。・・・・・・

インドの Bt 綿栽培農家では、大量の農薬が撒かれている。世界のコットン出荷量世界第 2 位のインドでは、そのほとんどがモンサント社が開発した GM（遺伝子組み換え） 綿である。インドの種苗会社マヒコは 1999 年にモンサント社に買収され、細菌由来の殺虫性毒素が組み込まれた「Bt 綿」は、綿花の天敵である蛾の幼虫が近寄らないように開発されたものだったが、その実、他の新たな害虫や立ち枯れ病が発生して、結果、大量の農薬を撒かなければならない。モンサント社が販売する除草剤「ラウンドアップ」 を飲んで、畑で自殺する人が急増している。・・・・・・

書　評　アメリカ服飾社会史研究会会報 No.13

鴇田　章

鴇田章氏が会報 No.12 にお寄せ下さった書評を再度、掲載させていただきます。

絹とアンティークストッキングの収集研究を 50 年超続けている私にとって、ヨーロッパの服飾史の文献は数多く購入し、目を通しているが、アメリカの服飾史は書店や図書館で探しても非常に少なく、ましてやストッキングに関するものはほとんど無いといっても過言ではない。その中で濱田雅子会長の著書『アメリカ服飾社会史』(東京堂出版、2009 年) は私にとって唯一のバイブルである。その近現代篇として出版された最近の著書の『パリ・モードからアメリカン・ルックへ』（2019 年出版）と『アメリカ服飾社会史の未来像』（2020 年出版）の 3 冊シリーズは私の研究には欠かせない貴重な文献である。今回、その後編の『アメリカ服飾社会史の未来像 ー衣服産業史の視点からー』の書評の機会を与えられ、大変光栄に思っている。

さて、その『アメリカ服飾社会史の未来像』は 1960 〜 2000 年代にかけてのファッションからファスト・ファッションへの転換時期を捉え、濱田氏がアンドリュー・モーガン監督の映画「ザ・トゥルー・コスト —ファスト・ファッション 真の代償—」は世界を牽引しているファスト・ファッションをテーマにしたドキュメンタリーで、流行を取り入れ、大量生産された洋服が低価格で供給され、ほぼ使い捨て同然になってゴミの山となり、製造に携わるバングラディシュの人たちの労働環境、低賃金長時間労働の中で化学薬品の垂れ流しによる環境汚染やインドでは遺伝子組み換えの綿栽培農家の悲惨な現状を浮き彫りにしたものである。

アメリカ衣料産業が直面する深刻な課題の解決策を、濱田氏が模索する時に出逢ったニコレイ・アンゲロフ博士の著書『The Dirty Side of the Garment Industry, Fast Fashion and Its Negative Impact On Environmental and Society』(CRC Press, Taylor & Francis Group, Boca Raton, London, New York, 2016) に基づき、環境にやさしいファスト・ファッションの新しいビジネス・モデルの構築に向けアンゲロフ氏の提言を紹介し、濱田氏の視野の広い考察力で見解を導き出し、「科学技術の発達が産んだ地球環境の破壊には、科学技術をもって対処するしか方法はないであろう。」と結んでいる。読み応えのある一冊と言える。

更に、2021 年 4 月 7 日には、アメリカ服飾社会史 続編の『20 世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実』を出版、3 年で 3 冊という勢いで執筆される濱田雅子氏の疲れを知らないパワフルな活力と鋭い洞察力には頭が下がる思いである。まだまだ続く続・続編に期待しつつ、今からゾクゾク、ワクワクしている。

アマゾン　カスタマー・レヴュー☆☆☆☆☆

鴇田　章

アメリカ服飾史研究の第一人者といわれる濱田雅子博士が、長きにわたる研究の成果をまとめた渾身の力作である。アメリカ近現代服飾史とその未来を知る上で､服飾を取り巻く環境となる気候、風土、政治、経済、文化、宗教などとの関わりまでを意識して取り組まれた作品である。更に、巻末には多くの参考文献、図版出典や索引が詳しく掲載され、資料が豊富で研究者や学生には読み応えのある必携書といえる。

吉川佳英子

2000年代半ば頃から、日本でも主流となったファストファッションに注目し、それをアメリカ服飾史の流れに位置づけるとともに、多くのデータの分析をとおして、アメリカ衣服産業の未来像を浮かび上がらせせようとする著者濱田氏の野心的著作である。圧巻なのは、ニコレイ・アンゲロフ氏のファストファッションをめぐるシビアな見解、すなわち安価だが高品質の布地の製造は、毒性の高い化学物質の汚染を引き起こすという指摘を共有し、会社パタゴニアの事例を視野に収めつつ、濱田氏が、人間と環境の健康状態を向上させる製品を未来の理想に掲げる点だ。人間の今後のあり方を、「衣服」を切り口に真摯に模索する著者の切なる願いがビビッドに伝わってくる。

知的生きか太郎

このところ,アメリカのファッション業界は「J.Crew Group」破産法第11章の申請や,バーニーズ・ニューヨーク，JCペニーとシアーズなどの経営問題は時代の変革期にきていると考えられます。この本は，アメリカの服飾ついて，学術的に解説されていて，アメリカの文化の一端を垣間見ることができる本です。また消費者の行動なども経営学的に解説されていてすばらしいと思います。

20 世紀アメリカの女性デザイナーの知られざる真実
ーアメリカ服飾社会史　続篇





L-85　　服装規定

ペーパーバック（Next Publishing インプレス R&D POD 出版サービス）
2021 年 4 月 7 日発売
アマゾンで販売　　3,300 円（税込み）
電子書籍　アマゾン　kindle 版　1,000 円

内容紹介

本書は、筆者の『アメリカ服飾社会史』シリーズの第 4 編である。本書のテーマは、端的に言えば、20 世紀アメリカの女性ファッション・デザイナーの認知度である。アメリカの服飾研究者は、近年、この問題に精力的に取り組んでいる。彼女たちは、なぜ、認知度が低いのか。この点については、アメリカの服飾研究者は、正面切って見解を表明していない。筆者の憶測ではあるが、本書では、筆者のオリジナルな見解と今後の課題を打ち出した。

本書は服飾研究者、ファッションを学ばれている学生の皆様、ファッション・デザイナー、アパレル産業で衣服生産に携わっておられる皆様の必読書と言っても過言ではない。学術書ではあるが、一般読者の方々むけに、わかりやすく、読みやすい著作になるように、創意・工夫した。国際的に見て、デザイナーの認知度のランキングは、いかがなものだろう？クリスチャン・ディオール、ココ・シャネル、イヴ・サンローランの知名度の高さは、言うまでもない。ラルフ・ローレン、カルバン・クライン、ダナ・キャラン、マーク・ジェイコブス 、マイケル・コースなどは、アメリカのファッション業界で著名な名前である。彼らは、収益性の高いグローバルブランド。

になっている。

本書では、以下の 6 人の 20 世紀アメリカの女性デザイナーを扱っている。

1920 年代、サリー・ミルグリムはアメリカのファッションでパリの支配を克服し、パリのオートクチュールからの独立を宣言した。彼女は、現代のファッション・マーケティングのパイオニアでもあった。

ジェシー・フランクリン・ターナーは、ニューヨークで経済的に成功した永続的なクチュールビジネスを確立した最初のアメリカのファッション・イノベーターである。

ティナ・リーサは、1950 年代に芸術家として育った。世界中を旅行しており、フェアトレード、持続可能性、デザインと生産におけるグローバルな展望を優先した。

ヘレン・リーとスザンヌ・ゴダートは、消費者の豊かさに支えられて、子どものファッションを大人の服と同等に位置づけようと努力し、成長する人口統計にファッションの視点をもたらした。

フィラ・ベネンソンは、ロシアからの移民であった。ニューヨークで名声を確立し大恐慌と第二次世界大戦を乗り切った大規模で多様なファッション・ビジネスを築いた。

皆さんは、これらのデザイナーをご存じでしょうか？おそらく、ご存じない方が多いのではないでしょうか？アメリカでも知られていないという。こんな凄い活躍をしたファッション・デザイナーが、なぜ、知られていないのだろう？

今日の社会では、SNS による情報の受発信は、当たり前のコミュニケーション・ツールである。本書で対象とした SNS が未発達の時代には、認知度を高めるには、どのような方法があったのであろうか？

本書では、アメリカの服飾研究者の研究に基づいて、20 世紀アメリカで活躍した 6 人の女性デザイナーの知られざる真実に迫ってみた。本書の出版によって、彼女たちの認知度が、我が国でも高まることを願っている。

目　次

二〇世紀アメリカの女性デザイナーの認知度に迫る

書評

吉川佳英子　愛知工業大学教授

本書は『パリ・モードからアメリカン・ルックへ』（2019）の第二部を発展させたもので、6人のアメリカの女性デザイナーを紹介しながら、なぜその活躍にもかかわらず、今日、彼女たちの認知度が低いのかを解き明かす意欲的な内容だ。

6人の女性デザイナーとは、サリー・　　ミルグリム（1898－1994)、ジェシー・フランクリン・ターナー（1881－1956)、ティナ・リーサ（1910－1986)、ヘレン・リー、スザンヌ・ゴダート（1923－2002)、フィラ・ベネンソン（1899－1977）だ。

サリー・ミルグリムは、アメリカン・ファッションのパイオニアであり、20世紀初頭にはアメリカのプレミア・ファッション・デザイナーの一人であった。ジェシー・フランクリン・ターナーは、ニューヨークでクチュールビジネスを確立した最初のアメリカのファッション・デザイナーだった。ティナ・リーサは、グローバルな視点と、ファッション業界の生成力へのコミットメントと信念がたいへんユニークであった。

ヘレン・リーは、子ども服専門のスペシャリストであり、スザンヌ・ゴダートは、ガブリエル・シャネルにしばしば例えられ、フィラ・ベネンソンは、大恐慌と第二次世界大戦を乗り切った大規模なファッション・ビジネスを築いた。

本書では、20世紀アメリカで活躍したこれら6人の女性デザイナーの知られざる真実に、多彩な資料や貴重な写真で、説得的に肉迫している。ちなみに、彼女たちがなぜ今日、認知度が低いかについてのアメリカ服飾研究者による明快な見解はこれまでのところ、表明されていない。

第6章において、濱田氏は、第二次世界大戦前から大戦後にいたるファッション界のメディアによる報道の流れをたどりながら、ヨーロッパのファッション動向とアメリカのファッション動向を多角的に考察する。そのうえで、以下の5つの点から、6人のデザイナーのこれまであまり指摘されてこなかった事実を列挙する。

①第二次世界大戦後のアメリカ人女性デザイナーたちは、パリ・モードの影響の陰に隠れることになった。②小売業者とデザイナー間の経営をめぐる確執が絶えなかった。③移民のユダヤ人に対する差別があった。④ドロシー・シェーバー亡き後、「アメリカン・ルック」のキャンペーンが弱体化した。⑤20世紀に活躍したアメリカ人女性デザイナーに関する諸情報のアーカイブが整備されていない。

これら5つの点をふまえたうえで、これまでの研究で触れられることの少なかった6人の女性デザイナーの認知度が低いことについて、濱田氏は、これらの諸事情が複合的に作用した結果であると結論付ける。著者が導き出した結論は、パリとアメリカを視野に収めたダイナミックなものであり、研究者のみならず多くの読者に資するものだ。服飾はもともと人の営みに大きく関わるものであり、服飾史は服飾の分野のみならず、幅広く文化を語る研究であり、社会の動向を考察する研究でもあるだろう。

本書は、歴史研究家である濱田氏の、手堅い資料の分析に基づいたたいへん明快な提言と示唆に満ちている。この著作は、動乱の時代を「ファッション」という切り口からアプローチした、時代の意味を読み解く書としても位置づけされ得るだろう。じっさい、多彩な可能性を秘めた作品なのであり、そのような力作の完成に拍手を送りたい。

なお、本書が、前作同様、「POD出版」という新時代の出版方式による野心的な著作であることに加えて、著者による『パリ・モードからアメリカン・ルックへ　アメリカ服飾社会史近現代篇』（2019）が「ネクパブアワード2022　審査員特別賞」を2022年3月に授賞したことを付記しておこう。

児嶋きよみ　Office Com Junto 主宰

まず、写真や図版の出典や事項索引などの詳細な記述に驚かされる。もうひとつの驚きは、ご自身を、「筆者自身が服飾デザイナーであり、服飾研究者である。それゆえ、高価なオーダーメイドもプレタポルテも既製服も手掛けてきた立場から、パターン分析を行わせていただいた次第である。」と語っている点である。（p１１３）

この書の問いは、「今日のアメリカにおいて、1930 年代に認知されたアメリカの 60 人のデザイナーの一覧には、サリー・ミルグリム、ジェシー・フランクリン・ターナーの名がみられるにもかかわらず、なぜ彼女たちの認知度が低いのか」であろう。筆者は、その理由をいくつか挙げている。

SNS の情報受発信のない時代には、①レーベルを商品につける。②ファッション雑誌に名前を出す。③新聞などのメディアの広告に登場するなどの方法や機会があった。

第２次世界大戦中は、パリ・モードが途絶え、アメリカ人デザイナーが頭角を表わしたが、戦後のパリ・モードの復活やマーチャンダイザーのドロシー・シェーバーの死によってアメリカ人デザイナーは二次的な存在となり、認知度が低くなったと思われる。

児嶋は、2022 年の回りを見回した時に、デパートや服飾雑貨店の様子を見ると、まず気づくのは、コロナ禍もあり、ロシアの戦争仕掛けもあり、服を買いに街に出る人の少なさである。まず、食事に使う費用が主で、着る物は後回しになるかもしれない。ウクライナのロシアに占領された街の製鉄所の地下で２ヶ月も過ごさなければならなかった多くの人が、解放されて逃げる時の様子を SNS を見る事がある。「衣服の色数が多いと、元気に見えるな」「生後数ヶ月の子どもたちをどのようにして、地下の太陽の見えないところで２ヶ月も見守りができたのか？」など謎が多い。

亀岡でも、リユースの会で不要になった衣服 (子ども用・大人用) を集めて 100 円ほどで売る活動を続けている。購入するのは、通常の市民はもちろん、外国から実習生として来日し、母国の家族に少しでも収入を送金する必要のある人も含まれる。いつも同じ服ではなく、新しい服が着られるのならとうれしそうに買って帰る姿がある。ここに、服のデザイナーの名前はあっても見ないという現実がある。

本書には、1930 年代のイブニングのガウンや、日常着の写真も掲載されている。アメリカは第１次世界大戦も第２次大戦も、アメリカ本土は痛まなかったので、早くゆるやかなデザインが広まったのであろうか？

戦後生まれの我々も、家族の衣服を思い出してみると、家族によってちがう部分と、ほとんど同じ部分の両方があると気がつく。私の母（昭和３年生まれ）は女性の妹が５人もいるが、全員がミシンを使い、子どもたちの服や自分の服を縫い上げていた。その子どもの服は、大体上から下へ譲り受けていたと思う。それと、日本の場合は、中学校と高校は制服があることが、衣服への関心を遅らせたのではないかと思う。卒業してはじめて、「さて今日は、何を着ようか？」と考えるのではないだろうか？

日本は第二次大戦後、街の立て直しをしながら、ようやく洋服に関心を持ち出すには、おそらく 10 年はかかったのではないだろうか？盛り上がった時代はあったと思う。しかし、現在は、ちょっと回りを見わたし、何が今必要なのだろうかと考える習慣がついたと言えるのではないだろうか？それは、アメリカも同じではないかと思う。そうなると、アメリカ人の優れたデザイナーの研究に向くのには少し時間が必要かもしれない。

アマゾン　カスタマー・レヴュー☆☆☆☆☆

鴇田　章

アメリカでの認知度は低いが 20 世紀のアメリカン・ルックの開発に貢献し、活躍した 6 人の女性デザイナーを取り上げ、濱田氏の幅広い見識と考察力で、丁寧に分かりやすく紹介された貴重な一冊である。デザイナーの作品やイラスト、パターンなど多くの写真や図版がカラーで掲載され、脚注や出典も詳しく記された学術書であるが、一般読者にも読みやすい作品になっている。

吉川佳英子

本書は『パリ・モードからアメリカン・ルックへ』(2019) の第二部を発展させたもの。6 人のアメリカの女性デザイナーを紹介しながら、なぜその活躍にもかかわらず、今日、彼女たちの認知度が低いのかを解き明かす意欲的な内容だ。最新の研究をふまえ、大変明快に論じられている。彼女たちの認知度の低さは、第二次世界大戦後のパリ・モードの動静が大きく関わっているが、理由は複合的で、彼女たちの業績等のアーカイブの未整理も影響している。著者が導き出した結論は、パリとアメリカを視野に収めたダイナミックなものであり、研究者のみならず多くの読者に資するものだ。力作に拍手を送りたい。

写真が語る近代アメリカの民衆の装い
—Guide Book of Joan Severa: *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and fashion 1840-1900* ―



『写真が語る近代アメリカの民衆の装い』（株式会社 PUBFUN 2022 年 4 月 15 日）B5 判　p.352

※株式会社インプレスホールディングスと株式会社メディアドゥは、両社のプリントオンデマンドサービス事業を統合し事業展開を行う合弁会社 PUBFUN を 2022 年 4 月 1 日に設立しました。

アマゾンでペーパーバック販売中
版型・定価　B5 判　3,850 円（3,500 円 + 税）
Kindle 版　1,500 円　（4 月 16 日発売）

【内容紹介】

近代アメリカの民衆の装いを、写真から読み解いた他に類を見ない画期的な本です。一般の読者の皆さんにもわかりやすく、面白く、物語風に書かれ、思わず、民衆の生活文化史の世界にいざなわれます。

私たちのまわりには、バックグラウンドも名前もわからない人々が写った沢山の写真が残されています。実際に過去に着用されていた衣服に馴染みがないときに、無名の被写体が写った写真に示された衣服を解釈しようとすると、彼らが他の種類の歴史的な分析を行うどれほどすぐれた腕前をもっていようと、間違いを犯す可能性があります。

Joan Severa, Dressed for the Photographer: Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900, The Kent State University , Press, 1995.

本書は、ミドルクラスや下層階級のアメリカ人たちが、ダゲレオタイプの銀板写真技術が導入された 1840 年から 1900 年の 60 年間に、記念写真や日常生活の写真に、どのような装いでおさめられたのか、かれらのバックグランドや服装のディテールの分析も含めて、マテリアル・カルチャー（物質文化）の視点から書かれた Joan Severa 女史（1925-2014）による大作です。掲載された写真は何と 277 枚。服飾の専門家の視点で写真のなかの服装が的確に分析されています。

ヨーロッパやアメリカの上流階級の装いを扱った書物は、沢山、ありますが、アメリカの庶民（民衆）の装いを扱った書物は、J・セヴラ女史の上記の著作以外には、一冊もありません。
この大部な著作は、ジョーン・セヴラ女史が 30 年と言う歳月をかけて取り組まれた大作です。濱田のこの著作は、読者の皆様がジョーン・セヴラ女史の約 600 ページの大著をご活用いただくためのいわばガイドブックとしてまとめたものです。ジョーン・セヴラ女史の写真分析に基づいて、筆者の独自の立場から、写真が語る近代アメリカの民衆の装いを分かり易く解説させていただきました。

筆者はアメリカの庶民服を 38 年間に渡って研究してきました。本書は筆者の新しい研究書の普及版であり、翻案権を遵守して書かれた著作です。

本ガイドブックでは、ダゲレオタイプ、アンブロタイプなど写真技術史についても紹介しています。写真技術の発展に伴い、被写体の範囲が一部の金持ちの中流階級以上の人々から、中流・下層の民衆へと広がり、家庭裁縫に携わっていた人々、学校の教師、リフォーム・ドレスの運動に携わっていた人々、移民、西部入植者、農業労働者、解放奴隷、自由黒人、ネイティヴ・アメリカンなどミドルクラスや下層階級の様々なカテゴリーに属する庶民の写真が掲載されています。

我が国でも、海外でもとてもマイナーな分野の研究書です。セヴラ女史が収集されて、解説された素晴らしい、目を見張るような材料を、本ガイドブックを通じて、服飾研究者や学生や衣装デザイナーの皆様や映画監督の皆様や写真のアーキヴィストの皆様のお手元にお届けできれば幸いです。多くの読者の皆様に愛読されることを願ってやみません。

目　次

第６章　人種・民族の視点から見た服装
西部入植者 解放奴隷 自由黒人 ネイティヴ・アメリカン 移民の服装
第７章　まとめ

第Ⅴ部　1870 年代
第１章　歴史的背景
第２章　クリノリン衣裳からバッスル衣裳へ
階級別・職種別にみた女性服（新聞配達 織物工場の女子工員）服種別、部位別にみた女性服（衿 袖 裾 外套 部屋着 装飾　髪型 かぶりもの）
第３章　移民の服装（ノルウェーからの移民）
第４章　庶民男性の服装
第５章　子ども服
第６章　まとめ

第Ⅵ部　1880 年代
第１章　歴史的背景
第２章　衣服の民主化
第３章　金持ちと庶民女性の服装
階級別にみた女性服 服種別、部位別にみた女性服（衿 袖 裾 外套 部屋着 装飾 髪型 かぶりもの）
第４章　庶民男性の服装
第５章　子ども服
第６章　まとめ

第Ⅶ部　1890 年代
第１章　歴史的背景
第２章　バッスル衣裳の終息
第３章　庶民女性の服装
TPO・職種別にみた女性服（キャンプ 看護学校の制服 工場の労働 自転車乗車着）部位別にみた女性服（袖 下着 シャツブラウス ラップ アクセサリー 帽子 履物）
第４章　庶民男性の服装
第５章　子ども服
第６章　まとめ

用語解説
あとがき
事項索引

アマゾン　カスタマーレヴュー☆☆☆☆☆

鴇田　章

ジョーン・セヴラ女史が 30 年かけて出版した大作を濱田雅子女史により丁寧に分かり易く解説したガイドブック

本書はウィスコンシン・ミュージアム歴史協会の学芸員を３０年にわたって歴任されたジョーン・セヴラ女史がその傍ら、現存する銀板写真，他を全米から収集。５９２ページの大著『Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion 1840-1900』で写真分析に基づきそのバックグランドや服装のディテールなど類をみない画期的著書を 1995 年に出版したのである。

その大作を今回、出版当初から筆者濱田雅子女史が取り組んできたものを分かり易く解説し、ガイドブックとしてまとめ上げた作品である。また、写真技術の発達についても年代別に紹介。更に筆者が使用した写真の種類の推移を表にまとめ分析している。中流階級から民衆へと広がりを見せた写真が 120 ～ 180 年も経過しているにも拘らず、原板管理の良さが鮮明で綺麗なものばかりであり、服装の素材感や仕立て方まで知ることが出来るのには驚かされた。服飾研究者やデザイナー、学生、また、映画や写真関係者などにもぜひ読んで欲しいお薦めの一冊である。

H

多くの貴重な写真と詳細な解説

アメリカの服飾史について興味があり、本書はアメリカの服飾史について日本語で読むことができる貴重な文献だと思います。
1840 年代から 1900 年までの近代アメリカの民衆の装いについて本のタイトルの通り、多くの貴重な写真を詳細な解説とともに見ることができます。そのため、見やすく分かりやすいです。そして、本書はただ当時のアメリカの服装について知ることができるだけでなく、それぞれの写真の背景情報や階級別から見た当時の服装を理解することができます。
アメリカ史や服飾史など、少しでも興味がある方はぜひ一度ご覧になることをおすすめします。

吉川佳英子

アメリカの庶民の服飾をテーマにした他に類を見ない力作

『写真が語る近代アメリカの民衆の装い』本書は Dressed for the Photographer : Ordinary Americans and Fashion、1840－1900 (1995) のいわば大型ガイドブックだ。アメリカの庶民服研究者ジョーン・セヴラ氏の大著を筆者が独自の立場から解説した力作で、352 ページから成る本書は貴重な情報にあふれている。ジョーン・セヴラ氏が扱った 277 枚にのぼる 1840 年から 1900 年のアメリカ人（ミドルクラスないし下層階級）の装いの写真をふんだんに取り入れ、写真技術に始まり装いの細かな用語解説に至るまで、実に精緻な説明に徹している。このような写真や資料に導かれ、私たちはアメリカ庶民の日常的な装いを、女性のみならず男性、そして子どもに至るまで、リアルに理解することができる。服飾に関する書籍が、ヨーロッパにしてもアメリカにしても、上流階級を対象にしたものが目立つなかにあって、アメリカの庶民を対象にしたことは、もうそれ自体、貴重と言うほかない。本書は他に類を見ないマテリアル・カルチャーにアプローチした野心的な書なのである。

本書の一齣から（p.304）



写真 256（1896 年頃）
（Joan Severa　p.515）
The Oakland Museum 所蔵

写真 256（1896 年頃）（p.515）は、The Oakland Museum の所蔵品である。

これは、セヴラ女史の著作に掲載された写真のなかでも、とりわけ目を見張って、見入ることを余儀なくされる写真である。何はともあれ、セヴラ女史の解説の必要な個所を紹介させていただく。

カリフォルニアのネリー・リード・メイヨン（Nellie Reed Mayon）が、限界まで大きく膨らんだ袖の付いた 1896 年の最新流行スタイルのツイードの新品スーツで写真に収まっている。この巨大な袖は、身頃の肩幅を極端に狭くしたところに大きくてかさ高いプリーツを取って付けられており、裏でしっかりと支えられて、広く横に広がる見た目を演出している。…………この頃には多くの仕立屋は、重い袖をうまく支えるために身頃のショルダーラインを広くしていた。……ネリーのスーツスカートの正面の生地は A 字形に裁断されており、布目に対して斜めに裁断された端に、布目に沿ってまっすぐ裁ったサイドゴアが縫い付けられている。このスタイルであれば、背中側はおそらくガセット［三角襠］が入れられ、後ろ中央にボクスプリーツを取って膨らみと広がりを出しているはずである。この種のスカートは一般に裏付きで、裾から 12 ～ 14 インチ［30 ～ 35 センチ］くらいの部分はしっかりハリを持たせ、裾の縁には、裾のラインを保ちつつ擦り減りを防ぐために、ヘムセーバー（hem saver）のブレード（硬めの毛でブラシ状になったスタイルであることが多い）が挿入されていた（(Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashin, 1840-1900,* p. 515 より引用)。

まるで、美空ひばりのような一世を風靡した歌手の舞台衣装とみまがうセンセーショナルな衣装である。

十九世紀アメリカのドレス・リフォーム思想
ー医学とジェンダーの視点からー



株式会社 PUBFUN　POD 出版　2023 年 3 月 14 日発売
アマゾンでペーパーバック　定価　2,750 円 (税込み)
Kindle 版　1008 円　アマゾン

【要旨】

本書『19 世紀アメリカのドレス・リフォーム思想』は、拙著『パリ・モードからアメリカン・ルックへ―アメリカ服飾社会史近現代篇―』（株式会社インプレス　R&D POD 出版、2019 年）〔ネクパブ 2022 アワード審査員特別賞授賞] の第一部の内容を、以下の二部に分けて、発展的に考察することを目指している。

本書が対象とする読者層は、服飾関係や女性問題の専門家、学生、介護や福祉関係の方々、ファッションやジェンダーや人生哲学・思想にご興味を持たれている一般読者の皆さんである。

第一部では、ジェイムズ・C・ジャクソン（James Caleb Jackson）のドレス・リフォーム思想と活動について、以下に示す彼の著作の翻訳紹介と考察を中心に扱う。

１．American Womanhood: Its peculiarities and necessities（1870）Maple Beach, N.Y. (public domain)

２．Jackson Sanatorium (1898). Year Book of the Jackson Sanatorium, Dansville, N.Y. (public domain　ed.).

３．How to treat the sick without medicine, 1871, HathiTrust Digital Library.　(public domain)

また、Jackson 博士の奴隷制廃止運動にも目を向ける。
これらの著作は、今日、改めて注目され、復刻版が出版されるか、あるいはデジタル版がネット上で配信されている。著作権は、いずれも public domain である。これらの歴史的資料（第一次資料）には、とりわけヨーロッパからアメリカに導入されたファッショナブルで拘束的な衣装が、女性の健康に及ぼす生理的影響という視点から、また、医者の視点から、赤裸々に分析されている。本書は、これらの著作物からジェイムズ・C・ジャクソン博士の著作とリディア・S・ハズブルック編集の『シビュラ』誌の内容をさらに掘り下げて考察した。また、ドレス・リフォームの問題

を健康増進、医療の視点のみならず、ジェンダーノ視点、社会運動の視点からも考察した。
19 世紀アメリカの非生理的なファッションが、女性の健康に及ぼした影響をリアルに描き、その治療がどのように行われていたのかについて、ひじょうに具体的に解説されている。19 世紀アメリカの服装問題のみならず、わが国の今日の超高齢社会 における健康増進施策、すなわち、医療やリハビリの在り方にも、大いに資する内容の古典である。

第二部では、19 世紀アメリカのドレス・リフォーム運動の指導者であったリディア・セイヤー・ハズブルック（Lydia Sayer Hasbrouck）が編集・発行した新聞『シビュラ』（Sibyl）の記事の内容紹介と考察をおこなう。

ジェイムズ・C・ジャクソン博士は全国ドレス・リフォーム協会の創設から解散まで、中心人物として活躍した。その意味で、本書の第一部と二部は、相互に関わりあっている。本書は『パリ・モードからアメリカン・ルックへ』の第一部の内容を深め、発展させた著作であると確信する。

本書は、これらの著作物からジェイムズ・C・ジャクソン博士の著作とリディア・S・ハズブルック編集の『シビュラ』誌の内容をさらに掘り下げて、考察した。本書では、発行の背景、読者層、内容の詳細を『シビュラ』誌の記事を紹介・考察するという手法で、きわめて具体性をもたせて扱った。また、ドレス・リフォームの問題を健康増進、医療の視点のみならず、ジェンダーの視点、社会運動の視点からも考察した。

第三部のまとめでは、第一部、第二部のまとめを行い、筆者の見解を明記した。

第 4 章にドレス・リフォーム運動の概要をまとめた。この章からお読みいただくとドレス・リフォーム運動に、より親しみをお持ちの上、この運動の思想をご理解いただけるのではないでしょうか。また、この運動にさらにご興味のおありの皆様は、拙著『パリ・モードからアメリカン・ルックへ』を読まれた上で、本書を読んでいただくのも読み方の選択肢といえよう。

目次

本書の一齣から（p.44）

リフォーム・ドレス姿のルーシー・J・ラッセル

保養施設「丘の上のわれらの家」で（ニューヨーク州ダンズヴィル）



1864 年
Deborah Fontana Cooney
所蔵

この写真のジョーン・セヴラ女史の解説を以下に紹介する。ルーシー・J・ラッセル（Lucy J. Russell, 1830-92）は、ニューヨーク州ダンズヴィルにあった保養施設「丘の上のわれらの家」に滞在していた 1864 年に、この写真を撮ってもらった。彼女は、この保養所生活の主な特徴だった健康的な食事、軽い運動、ウォーキングといった養生法を最大限活用するための服を着ている。彼女の体形は明らかにコルセットをつけていない中年女性のもので、ファッショナブルな体形と比べるとずっと胸部が平板でウエストが太い。

この服は、ダンズヴィル滞在のために特別に作られたものか、そうでなければ、コルセットをつけない前提で作られた服である。なぜなら、ゆったりとした前身頃とウエストの仕立が作業用ドレスの形にカルト・ドゥ・ヴィジット　なっているからである。ドレスのスタイルは、丈が短いこととフープ を使用しないことを除けば、当時の女性たちが着ていた服とそれほど ど違わない。ネックライン、縁飾りがついた前立て、袖プ リーツを入れたビショップスリーブは日常着によく見られるデザインだし、 ダーツを入れてゆったりさせた身頃も別に珍しくない。彼女の細いズボンは、スカートの裾を短く縮めた時に切り落とした布か、または服を最初に仕立てた際の残り布で作られている。彼女のブー ツは、ドレス改革派が履いていたのと似たタイプだが、靴底は薄 い革製のように見える（Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashin, 1840-1900*, p.250)

アマゾン　カスタマーレビュー　☆☆☆☆☆

鴇田　章

十九世紀アメリカのドレス・リフォーム思想の資料をパワフルに収集し、発展考察された力作

著者が 2019 年出版した『パリ・モードからアメリカン・ルックへーアメリカ服飾社会史近現代篇―』の中でドレス･リフォーム運動の復活から衰退へと題し、ドレス･リフォーム運動が紹介されています。『十九世紀アメリカのドレス・リフォーム思想―医学とジェンダーの視点から―』は、この運動の指導者であったリディア・セイヤー・ハズブルックが編集・発行した新聞『シビュラ』、キャスリーン・トーレンス女史の学位論文、そして、全国ドレス・リフォーム協会の創設から解散までの中心人物として活躍したジェイムズ･C･ジャクソン博士の著作などの資料を著者はパワフルに収集し、読み解き、詳しく掘り下げ発展考察した著者ならではの力作と言える作品です。現在の日本が直面している超高齢社会の健康増進問題や社会問題となったジェンダーの視点からも考察されています。
今回の作品は第一部、第二部、第三部に分かれ書かれていますが、どこから読んでも良いように編集されているので、興味を持った人物から順に読むことで興味が更に深まり、面白くなると思います。ぜひ、試してみてください。
ジャクソン博士の著作の理論構成は、実に緻密で、奥深いものがあり難解です。
従って、第一部第 2 章第 2 節のジャクソンサナトリウムから読まれると、ジャクソン博士の深遠なドレス・リフォーム思想の世界に自然に誘われるように思います。
　また、第二部の第 4 章は、リフォーム・ドレスを身につけた女性たちの声が、まるで今日の SNS のように、身近に聞こえて来ます。

吉川佳英子

女性の健康に影響を及ぼした 19 世紀アメリカファッション

『19 世紀アメリカのドレス・リフォーム思想　―医学とジェンダーの視点から―』は、たいへん迫力ある著作です。既刊『パリ・モードからアメリカン・ルックへ』の発展形と言ってもよく、J.C. ジャクソン博士（医者であり、全米一のサナトリウムを経営して、コルセットで身体を痛めた 5000 人もの女性たちの治療に当たっていた）の著作やリディア・セイヤー・ハズブルック博士（ドレスリフォーム運動の指導者であり、新聞記者であった）編集の『シビュラ（σιβυλλα、ギリシャ語)』を題材に、さらに精緻に考察が深められています。
　ジャクソン博士が告発するのは、それまでのコルセットで締め付けられた拘束的なドレスが、いかに女性の身体に悪影響を及ぼし、女性を苦しめてきたかと言う点です。そして、その告発は 19 世紀のジェンダー規範をおおいに揺さぶりました。19 世紀の衣服が当時のジェンダーイデオロギーと不可分であったことを筆者は強調しますが、ここが本書の見どころです。筆者である濱田氏は、ドレス・リフォームを社会運動の観点からとらえ､ジャクソン博士の言説である「人間の移動する権利」と「女性の市民権」に強い共感を示します。
　現代の超高齢社会の健康をめぐる施策を視野に収めるなら、本書が訴えかけるものは極めて大きいです。19 世紀アメリカのドレス・リフォーム運動は、今日の健康改革運動のルーツとして、私たちに多くのことを語ってくれますし、今後の日本社会のあり方についても、貴重な示唆を与えてくれます。

世界の民族衣装の事典





アパッチ族のブーツ　ビーズ刺繍
国立民族学博物館所蔵

丹野郁監修、世界の民族衣装の事典、東京堂出版、2006 年 9 月　濱田は第 8 章北アメリカ　333-362 頁、第 9 章メキシコ　372-377 頁を担当。

ISBN 9784490106688

判型・ページ数 B5・384 ページ

定価 本体 20,000 円＋税　　　絶版

世界各地の民族衣装を国や地域ごとに紹介する、初のエンサイクロペディア！着ることに表現された世界の人々の文化・習俗・思惟をこの一冊に網羅。

目次

【第 8 章の内容紹介】
メキシコの民族衣装を扱っています。

【第 9 章の内容紹介】
ヨーロッパ人到来 (1500 年頃) 以前の北アメリカには、それをさかのぼること 2 万年も前から、古 (パレオ) インディアンと呼ばれる狩猟民が住んでいました。彼らは、今から 1 万年以上も前に、尖頭石器を用いて、マンモス、マストドン、ウマ、大型バイソンなどを捕獲したのです。彼らの先史文化は古 (パレオ) インディアン文化と呼ばれています。それでは彼らの移植の背景はどうであったのでしょうか？周知のように、ウィスコンシン氷河期に氷河が発達して海面が低下し、それに伴い、ベーリング海峡のあたりが陸続きとなりました。彼らの祖先は、このときに、ここを通ってアジアからやってきたと想定されています。彼らは日本人と同じモンゴロイドです。また、ベーリンジアが水没し始めると、紀元前 8000 年頃から海岸沿岸沿いに船などで渡ってきた新しいモンゴロイドたちが、いわゆる「エスキモー」の祖先なのです。彼らの子孫は南北アメリカ全土に広がり、多種多様な社会を形成しました。最初のアメリカ人たちは、天然資源を活用し、それぞれの居住地の気侯・風土に柔軟に適応していました。彼らの衣服はアメリカ大陸全土の植物群と動物鮮を包含していました。メキシコ北部の北アメリカのネイティヴ・アメリカンの衣服は、著しく多様でした。繊維製のスカートからバッファローの毛皮製のローブ、絢爛豪華な羽毛製の戦闘用のボンネットからシンプルなヘッドバンド、念入りにビーズで装飾されたベストから毛皮製のパーカーに及んでいました。衣服を構成する諸要素のなかには世代から世代へと受け継がれてきた部族の慣習やスタイルやデザインに基づくものがありました。

彼らが形成した文化圏は 10 の文化圏に分類されています。それらは南東部文化圏、北東部文化圏、大平原文化圏、南西部文化圏、大盆地文化圏、高原地帯文化圏、カリフォルニア文化圏、北西海岸文化圏、亜北極文化圏、および北極文化圏です。

西部の文化圏はカリフォルニア、高原地帯、大盆地の三つに分けられます。生業としては狩猟も行われたのですが、採集の方がより重要でありました。この地域の文化は、周囲の北西海岸、大平原、南西部の諸文化の影響を受けており、一つの文化圏としての独自性も乏しいと言えます。民族衣装についても同じことが言えます。それゆえ、本書ではこれらの文化圏は扱っていません。

衣装が語るアメリカ文学



衣装が語るアメリカ文学、金星堂、 2017 年 9 月 1 日
定価（税込） 2916 円
ISBN 978-4-7647-1172-3

本書は，アメリカ，およびカリブの文学や文化に現れる「衣装」について，「時代の目撃者」，「民族を映す」，「『衣装』という表象」，「あざむく」という章構成のもと，様々な角度から検討したものである。本書を貫くのは，「衣装」という比較的わかりやすいテーマではあるが，一見しただけでは見えにくい表象や事象が，専門の目で探求されている。

目 次

アメリカ史にみる職業着
―植民地時代～独立革命期―



P.F. コープランド 著・濱田雅子 訳、アメリカ史にみる職業着 ― 植民地時代～独立革命期― Working Dress in Colonial America、せせらぎ出版、1998 年
IISBN-4915655814
Ｂ５判　上製本
定価：6,171 円（本体 5,714 円＋税）　絶版
第 16 回日本風俗史学会研究奨励賞授賞
日本図書館協会選定図書

植民地時代から独立革命期の 100 年間（1710 ～ 1810 年）にわたるアメリカ史にみる職業着が、200 点を超える挿し絵と 30 点余りの写真を駆使して歴史的背景とともにビジュアル化される。歴史・文学・服飾研究など多方面に役立つ平易な専門書。

目　次

図説　初期アメリカの職業と仕事着
―植民地時代～独立革命期―



P.F. コープランド著、濱田雅子訳、図説　初期アメリカの職業と仕事着ー植民地時代～独立革命期、悠書館、2016 年

定価］本体 2,800 円＋税

［体裁］四六判・304 ページ

［ISBN］978-4-86582-009-6

本書は 1998 年に『アメリカ史にみる職業着』として、せせらぎ出版より刊行された。

目次

【内容紹介】

1710 年から 1810 年までの 100 年間、新聞・雑誌に取り上げられたり肖像画などが残されたりしている上層階級とちがい、一般大衆や地方の農民がどのような職業に就き、どのような服を身にまとっていたのかを示す遺品は皆無に等しい。しかもこの時代のアメリカには、イギリスのホガースやパインのような下層階級の人びとを描いた画家が生まれなかったので、植民地時代のアメリカの一般大衆は、その時代に描写されないまま、歴史から消えてしまった。

著者コープランドは、移民としてやってきた人びとの本国（大多数がヨーロッパ）の絵画資料をもとに、アメリカの大衆の生活と服装を類推する方法をとり、さらに、逃亡奴隷を捕えるための広告や旅行者の明細書などにもとづいて、みずからイラストをおこし、仕事着の材質から着用の仕方まで詳細に解説をほどこした。図版はイラスト 223 点、写真 36 点にのぼる。

本書は、歴史から取り残されてしまった 18 世紀アメリカの中産階級や下層階級の生活の実相を、体系的かつビジュアルによみがえらせた貴重な文献である。



紡ぎ女　*1780* 年代
出典　「*Der Worten wurker*」と題する年代不明の版画 . ドイツ博物館所蔵 . [著者画]



植民地の大工　1777 年
出典　Copeland, *Everyday Dress of the American Revolution*

【濱田雅子の略歴】

神戸大学文学部史学科（西洋史学専攻）卒業。武庫川女子大学大学院家政学研究科修士課程（被服学専攻）修了。（一財）京都大学名誉教授森下正明研究記念財団主席研究員。元武庫川女子大学教授。博士（家政学）。日本ペンクラブ会員。西洋服飾文化史専攻。アメリカ服飾社会史研究者。

著書に、『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、*1996* 年）、『黒人奴隷の着装の研究』（東京堂出版、*2002* 年）、『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、*2009* 年）、『パリ・モードからアメリカン・ルックへ アメリカ服飾社会史 近現代編』（*POD* 出版 *2019* 年 *1* 月）〔ネクパブアワード *2022* 審査員特別賞受賞、〔電子書籍　アマゾン　*kindle* 版〕、丹野郁編『西洋服飾史 増訂版』（共著、東京堂出版 、*1999* 年）、丹野郁監修『世界の民族衣装の事典』（共著、東京堂出版、*2006* 年）、『衣装が語るアメリカ文学』（共著、金星堂、*2017* 年）（濱田 雅子担当、初期アメリカの奴隷の職種と仕事着 ―トマス・ジェファソンのプランテーションの場合）。『アメリカ服飾社会史の未来像―衣服産業史の視点から―』（*POD* 出版 *2020* 年 *4* 月）〔電子書籍　アマゾン　*kindle* 版〕、『*20* 世紀アメリカの女性デザイナ ーの知られざる真実―アメリカ服飾社会史 続編―』（*POD* 出版 *2021* 年 *4* 月）、〔電子書籍　アマゾン　*kindle* 版〕。『写真が語る近代アメリカの民衆の装い― *Guidebook of Joan Severa, Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion, 1840-1900*-―』（株式会社 *PUBFUN 2022* 年 *4* 月 *15* 日）〔電子書籍〕。『アメリカ服飾社会史』重版（株式会社 *PUBFUN 2022* 年 *7* 月 *26* 日）〔電子書籍　アマゾン　*kindle* 版〕、『十九世紀アメリカのドレス・リフォーム思想』（(株式会社 *PUBFUN 20203* 年 *3* 月 *14* 日）〔電子書籍　アマゾン　*kindle* 版〕翻訳書に、*P. F.* コープランド著『アメリカ史にみる職業着』せせらぎ出版、*1998* 年）〔第 *16* 回日 本風俗史学会研究奨励賞受賞作品〕J・ギロウ＆ B・センテンス著『世界織物文化図鑑』（共訳、東洋書林 、*2001* 年）、アルベール・ラシネ原著『世界服飾文化史図鑑』（共訳、原書房、*1992*）、*P.F.* コープランド著『図説初期アメリカの職業と仕事着―植民地時代～独立革命期』（悠書館、*2016*）など。他に

濱田雅子のアメリカ服飾史著作集カタログ
制作　濱田雅子
印刷　*2023* 年 *5* 月 *7* 日
発行　*2023* 年 *5* 月 *7* 日
発行所・印刷所　アメリカ服飾社会史研究所
〒*658-0032*　神戸市東灘区向洋町中 *5-1-521-1006*
Tel＆Fax　*050-1226-5070*
E-mail address :　*hamadakobe7@gmail.com*